

カンボジア・タサエンコミュニケーションでの研修報告と所感

研修期間:2月5日～2月26日

藤井 良子

1. はじめに

まず始めに、今回の研修は本当に沢山の方の理解とサポートがあったからこそ出来たのだと実感し、心から感謝しています。研修を許可して下さいました JMAS 本部の方々、現地で受け入れて下さった高山さん、高田さん、佐藤さんを始め、その他 JMAS スタッフのみなさんやカンボジアで出会った全てのみなさん、やりたい事を理解して送り出してくれた家族や職場の皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

カンボジアでの22日間の研修は内容が濃く、本当に毎日が充実していました。カンボジアを含め東南アジアには何度も足を運び様々な体験をしてきましたが、今回のようにひとつの村に長期滞在するというのは初めてであり、今までとは違った視点から物事を見て感じる事が出来ました。それは主に村人の生活や文化、考え方、そして戦争や地雷が与える影響、支援や復興、井戸やゴミの問題についてなどです。本やインターネットでの情報や短期の滞在では気付かない部分が沢山ありました。それは私の、そして日本の常識では計り知れないものでした。それは正に高山さんがよく言われていた「現場には真実がある」という事だったのです。今回の研修では着飾った自分ではなくありのままの自分である事で、見たもの感じたものを素直に中に取り込むことが出来ました。この報告書では、その「現場にある真実」を私が感じたままに書きたいと思います。

2. 研修に至った経緯

内閣府青年国際交流事業のひとつである東南アジア青年の船に参加した事や、地元の留学生との交流、タイでの日本語教育実習などをきっかけに、東南アジアに住む沢山の友人が出来ました。彼らの国やその文化に興味を持ち知っていくと同時に、良い面ばかりではなく問題点も身近に感じる様になりました。その中でも特にカンボジアやラオスは地雷や不発弾という大きな問題を抱えています。地雷問題は以前から知っていましたが、東南アジアに大切な友人が沢山出来てからは彼らの国が抱える問題の深刻さが他人事ではなくなり、より知る事で自分にも何か出来る事があるのではないか、と思うようになりました。

そして2008年7月、私は高山さんと出会いました。以前から高山さんの事は存じていましたが、お目にかかれたのはその時が初めてで、私から声をかけさせて頂きました。今でもその時の事は鮮明に覚えています。それから間もなくして、JMAS 愛媛支部のスタッフとしてお手伝いをさせて頂く様になりました。高山さんが帰国される際の講演会やそのお手伝い・食事会などを通して現地の事を沢山聞かせて頂き、今まで以上にカンボジアや地雷処理・地域復興等に興味を抱くようになりました。そして「いつか私も現地に行って自分の目で確かめたい、自分の肌で感じたい。」という気持ちが強くなり、今回の研修に至りました。

3. 地雷・不発弾の撤去作業

今回の研修での最大の目的は地雷が及ぼす影響や、それに携わる人達の思いや生活について知る事でした。研修中、地雷原には何度か同行させて頂きましたが、地雷についての知識は殆ど無く、「戦時中に地中に埋められ、それに触れた兵士や戦車を殺傷・破壊する爆薬で、現在もなお大量に残っている」という事くらいでした。今回の研修では戦争や地雷が及ぼす影響、そこで暮し、働く人達の現状、デマイナーの熱い思い、地雷原からの復興へのステップなど沢山の事を知る事が出来ました。



いたる所にある地雷原のどくろマーク

<地雷処理現場までの道中>



未来を象徴するマンゴーの木々

雨の影響で途中から道がぬかるみ、車は走れない状態だったので地雷原まで歩いていく事になりました。もちろん私達が歩くのは完全に地雷処理が終わった所だけです。その道中にはマンゴーが何百本と植えられていました。この地も以前は地雷原だったそうです。戦争時には沢山の人達が色々な思いを抱えて地雷を埋めていた事や、デマイナー達が汗を流して一生懸命地道に地雷処理を行った事、そしてそこが平和で安全な地になり、将来に夢を描きながらマンゴーを植えた人達の

事を考え、その思いを一步一步噛み締めながら歩きました。マンゴー畑を抜けると、地雷原は目前で、道の両端には赤い

紐が張ってありました。この先は地雷原だという印です。高山さんから「必ず道の真ん中を一列になって、私の後ろを歩くように。」と言われました。地雷処理した道とはいえ周りはまだ地雷原であり、危険と隣り合わせにいる事を忘れてはいけません。

<地雷処理現場について>

地雷原に着いて驚いたのは、方々から聞こえる「ウィーンウィーン」という金属探知機の反応音でした。その音は想像以上で、今でも耳に焼き付いたままです。まず始めに、その音を聞きながら高山さんから地雷原やデマイナー、事故時の対処、地雷撤去後の土地の利用などについて説明を受けました。

地雷処理をする目的はまず地雷によるけが人をなくす事、そして安全になった土地を地域の復興の為に有効に使う事です。地雷原には全て名前が付いていて、初めて見学した地雷原はM11415 という約5ヘクタールの所でした。1日に33名が地雷処理をして1ヶ月で約 1ヘクタールの土地の地雷処理が終わるそうです。この地雷原は5ヶ月で終わる予定ですが、この場所は地質もよく、私が訪れた頃は作業するには気候も丁度良いので、3ヶ月くらいで終わる予定だそうです。2ヵ月間も差が出るほど気候や地質で作業の進み具合が左右されると言う事に驚きを感じました。5月6月が雨季と乾季の間で作業が大変なのだそうです。地雷処理をする場所は年度の会議で決められます。コミュニケーションで相談し、郡、県へと話が行き場所と時期が決定されますが、決まっても収穫時期と重なると後回しになったりする場合もあり、臨機応変に行っているそうです。



高山さんの右がダムロン畑、左が地雷原

現場のポイントから見て右が撤去の終わったダムロン畑で左が地雷原という両方を一度に見る事が出来ました。地雷処理が終わっていると言うだけで、かたや安全で豊かな地であり、かたや命を落としかねない危険な地なのです。処理現場では地雷が出る、出ないよりも、安全な土地が広がっていくという事が大事なのです。

ある日地雷原を訪れた時、地雷が6つ発見されていたので地雷の爆発現場を見させて頂きました。そんなに大きくない地雷でしたが、爆発させる為に火薬を使っていた

とはいえ、爆発音も大きく、爆発すると知らされていたにも関わらず、本当に驚いてしまい爆発後少しの間は体が固まってしまいました。同じ爆発音でも、内戦時はその音と共に沢山の人が被害に合ってい



発見された地雷



宿舎で見た地雷

たのだと思うと背中が凍りつく思いでした。人の命を奪いかねない地雷がまだまだこの地に眠っていると思うと恐怖に駆られ、まだ全てが平和な地になった訳ではない事を改めて痛感させられました。

宿舎でも様々なタイプの地雷を見せて頂きました。信管は抜いてあり安全とはいえ、人を殺してしまう凶器なのだと思いますと恐怖を感じました。

< 戦場を感じる >

この地区はタイとの国境まで3km程の所にあり、敗走するポルポト軍と政府軍・ベトナム軍の戦闘が激しく、大量の地雷が埋められたそうです。地雷は敵を攻撃する為だけではなく、「自分の陣地が攻められないよう敵から守るために地雷を埋めていた」という事を初めて知りました。敵の攻撃から身を隠し、また陣地に敵が来難い様にする為に掘った「壕」もを見せて頂き、陣地を含め戦闘が行われていた場所を実際に見る事が出来ました。当時兵士が食べたであろう缶詰が錆び付いて転がっていたのはとても生々しかったです。

< 地雷撤去後の土地の利用 >

地雷撤去後の安全になった土地は、地域の復興の為に有効に使います。全て処理が終わってから政府や郡に引き渡し、道路や田畑、その他必要に応じて有効に活用します。田畑の場合、ダムロンを作ると1ヘクタールが3~4000ドルで、5ヘクタールだと日本円にして100万円近くの価値になるそうです。カンボジアでは日本の10倍の価値があるらしいので、その価値は絶大です。

ダムロンは3~5月に植え、11~12月に収穫されます。荒れ地にはゴマや大豆を植えると良いそうです。昔は森だった為、土は腐葉土で栄養があり、良い作物が出来ますが、10年もすれば土地は痩せ細ってしまいます。タイを例に見てみると、20年前から作物を作っているのでは土は痩せ細り赤くなっているそうです。この村もそうなるのは目に見えているので農業指導も行っていかなければならないと高山さんは言っていました。

< デマイナーのグループ編成と1日のスケジュール、作業内容、給料体系 >

地雷処理班は3つのグループから成っており、ひとつのグループは33名で、村民21名と CMAC 12名で編成されています。その中には班長や小隊長、医療チームも含まれており、合計99名となっています。



集中して作業をするデマイナー

デマイナーは6:30に集合して金属探知機やプロテクターなどを倉庫に取りに行き、大型トラックで現場に移動します。地雷原に到着したらまず朝ごはんを食べます。それから11:30までと12:30から14:30までは作業をします。昼休憩は1時間あります。地雷が発見された時は作業終了後にまとめて爆破させ、15:30に倉庫に戻り解散という流れです。

作業は1レーン幅1.5mを2人で行います。1人が幅1.5m奥行き40cmの範囲の雑木や草を刈り、もう1人がそこを金属探知します。出来た所まで棒をずらして、更に先の40cmというように確実に作業を行い繰り返していきます。



小さな鉄くずにも反応します

作業中は医療チームも待機していますが、重度のけが人が出た時は無線でプンペンに知らせ、シエムリアップからヘリが来てバタンバンの病院に搬送します。しかしヘリがけが人を乗せて出発するまでには約2時間かかるそうです。

現場のトイレはブルーシートで囲まれており、中は穴を掘った上に足場を作っただけのものでした。ゴミ箱は地面を掘ったものや竹で作られたものでしたが、分別して捨てられるように作られていました。

村民デマイナーは月に現在129ドルの収入があるのですが、その内30ドルは貯金し、3ドルは保険に当てているそうです。30ドルの貯金というのは退職金の代わりにCMACがそのような制度を採っており、また、保険制度がまだ整っていないので、全CMAC職員から3ドルを毎月徴収し互助目的で使われているそうです。



シートに囲まれたトイレ



現場のトイレ内



竹で作ったゴミ箱



穴を掘って作ったゴミ箱

<デマイナーにインタビュー>

処理現場の見学中に何人かのデマイナーにインタビューさせていただきました。

Q.今の生活の中で嬉しい事は？→A.家族と一緒に過ごせる事。仕事がある事。安定した収入があり、生活力がUPした事。

Q.この仕事で何が大変か。→A.木を切る事が大変。破片が多くて作業が難航する。

Q.暑い時期は集中力が途切れないか。→A.休憩を挟みながら行うので集中力は途切れない。

Q.自分たちの力でひとつひとつ地雷が無くなっていく事に対してどう思うか。

→A.凄く嬉しいし、事故も減って嬉しい。

Q.将来の夢は何か。

→デマイナーA A.夢は安定した仕事に就く事であり、今それが叶って本当に幸せである。それ以上の夢は今のところない。

→デマイナーB A.自分のお店を持ちたい。



デマイナーさん達と

村人の中で安定した仕事がある人はごく一部で、他の人は地主に雇ってもらって畑仕事をし、それでも足りない人はタイに出稼ぎに行ったりするそうです。デマイナーの中でも過去にそうした人は多いらしく、その経験をしている彼らは安定しているこのデマイナーの仕事はとても良い仕事であり、誇りに思っているのです。日本では失業率が上がってきたとはいえ、殆どの社会人に仕事があり、しかも自分で選ぶ事ができます。そんな環境で育った私は、彼女の「安定した仕事に就けて、家族と一緒に過ごせる事が一番の幸せでそれ以上の夢はない。」との言葉に感動し、涙が止まりませんでした。

それと同時に戦争を知らない若いデマイナーが一生懸命に地雷を撤去する姿や、地雷原の中で生活したり畑仕事をしている村人や地雷で足を失った人達を見て、戦争の傷跡や責任を後世が負うのはどこの国でも同じなのだと思います。昔兵士だった方から「自分はあの辺りに地雷を埋めていた。」と聞きました。この村では、自分が埋めた地雷で同じ村の人が被害に合うといった複雑な事が起こります。危険と隣り合わせになりながらもその地雷と共存し、同じ村人や自分の子供が処理をしているという事がこの村の現実なのです。

<高山さんとデマイナーの信頼関係>

作業中、デマイナーは本当に真剣な顔で取り組んでいます。休憩になると、笑顔いっぱいの普通の若者に戻ります。私もデマイナーと一緒に昼食を取ったのですが、持ち寄ったおかずをみんなで分け合い、笑顔や笑いの絶えない楽しい時間でした。昼食を取った後は木陰でハンモックに揺られて昼寝をします。あるデマイナーは自分のハンモックを私に差し出し、自分は木陰で地面に横になり寝ていました。別の地雷原ではCMACの大型トラックの下にハンモックを吊って昼寝をしている人がいたのですが、私にその場所を譲ってくれたのです。頭を少し持ち上げようものなら車体にぶつかるというギリギリの場所でしたが、気持ちよく寝させてもらいました。こういったデマイナーとのコミュニケーションは常にあり、彼らの思いやりは本当に温かいものでした。



地雷処理現場での昼食

高山さんはいつもこのようにデマイナーとコミュニケーションを取っているのだそうですが、一緒に食事を取り、言葉を交わす事でお互いの信頼関係も深まっていくのだと思います。

高山さんはデマイナーに対して基礎作りに2年半かけ、教育を徹底して行ってきたと言います。村人が何も知識のないところからデマイナーになって作業するという事はとても大変な事だと思います。そして1人1人の家庭状況も把握して信頼関係を築くことが大切であり、その関係は、高山さん:デマイナー99人=1:99ではなく、高山さん:デマイナー=1:1×99なのだを教えて下さいました。

<慰霊碑>

地雷原に行く途中で慰霊碑に立ち寄りしました。地雷撤去中の爆発事故で亡くなった7人のお墓です。7人に手を合わせる高山さんの後姿からは、7人に対する申し訳ないという気持ちと今後二度とこのような事故を起こさせないという強い決意が感じられました。どんなに訓練を重ねたデマイナーでも気を緩めると大事故に繋がりがねないし、地雷処理は緊張感の耐えない、ケガや死と隣り合わせの作業なのです。地雷や不発弾の多い地少ない地に関わらず、事故が起こらないように緊張感を持って安全な作業をする事が大事であり、安全な作業を維持していくには、規律をしっかりと守り、個々人の気の緩みが出ないようにしないと高山さんから教えて頂きました。



7人が眠る慰霊碑

7人の慰霊碑の中に8つ目の位牌がありました。高山さん曰く、これは7人とは全く関係の無いもので、村人の誰かが置いたものなのだそうです。この村ではまだお墓を建てられず、誰にも手を合わせてもらえない人も多い為、この慰霊碑だと沢山の人が来て一緒に拝んでもらえるだろうと言う思いで置かれたのではないかと高山さんは言いました。日本では考えられないかもしれませんが、この村ではそういう現実があるのです。

<CMAC 補助員試験>

デマイナー補助員の試験が行われるという事で、CMACとJMASのミーティングに立ち合わせて頂きました。試験官の意識を統合するために、高山さんからCMAC側にこんな要望がありました。①タサエン村は移り住んでから2年経たないと村民として認められないので、来たばかりの人は住民デマイナーとして働けない。そのチェックが去年は出来ていなかったのが村長さんにちゃんと確認を取るべきである。②以前は筆記試験をしていたが、学校がなかったり貧しいが故に学校に行けなかったりして、読み書きが出来ず筆記試験が出来ない人がいた。しかし、読み書きが出来なくても作業はしっかりできるのでそれは考慮する。③ドラッグをしている人は駄目。検査が出来ないので本人の様子や村人達の噂などで確認する。こういったものでした。

試験を始める前に読み書きが出来る人と出来ない人を別の部屋に分けました。43人中13人が読み書きが出来ないとの事でしたが、自分の名前だけは書けるという人は沢山いました。

試験内容は面接とヘルスチェックでした。ここで驚いたのが、男の人はヘルスチェックをパンツ1枚で受けるという事です。全ての人々が面接とヘルスチェックを終え、デマイナーの決定が行われました。そこでは家庭の状況をすごく考慮していました。子供が何人だとか、親が病気だとか、貰った給料をどうしたいとかか……。泣きながら家庭状況を話していた方もいたそうです。本人の能力はもちろんですが、家庭の状況を重視する事で、村の復興に繋がっていくのだと思いました。そして丁寧な作業が出来る女性を多めに採る事や、6つの村の中で合格者数に偏りがないように人口比に合わせるという配慮をしながら決定していたのも印象的でした。

識字の問題は間接的にしか聞いた事がなく、深く考えた事がなかったので、今回その現状を目の当たりにしてショックを隠せませんでした。20年前は戦争の影響で学校すらなかった為、今の私と同じ年頃の方でも識字率が低くても仕方がない事なのです。私が子供の頃は学校に行けるのが当たり前で、教科書やノート、鉛筆も当たり前に使っていたし、それに対してありがたみを感じる事はありませんでした。しかしカンボジアを始め、世界には学校に行きたくても行けない子供たちが沢山いると言う事を実感した瞬間でした。子供達には何の責任も無いけれど、ただそれが彼らにとっての環境であり現実であるという事なのですが、とても直ぐには受け入れられませんでした。読み書きが出来るに越した事はないのですが、出来なかったとしても、本人の意志や努力次第では仕事があるという事は素晴らしいと思いました。



真剣な眼差しで試験を受ける村人



CMACとJMASによる選考



集合写真

4. 戦争を終えて

ある家にお邪魔させて頂いた時、そこに住んでいる女性からお話を聞く事が出来ました。その女性は15歳から戦争に参加し、15歳で銃を背に戦ったそうです。日本では成人男子だけが戦争に行っていました。カンボジアでは女性も子供も共に戦っていたそうです。「戦争のある環境も戦争のない環境も同じ現実であり、そこで育った人にとってはそれがその人の環境である。戦争中は同じ国民同士が戦っていた。しかしそれは戦争が悪いのであって、個々の人間は何も悪くない。渦の中に入ると誰も抜けられないのだ。」高山さんはそう教えてくださいました。

研修中は何度か地雷で足を失った方にお会いしました。義足を着けて歩いたり、松葉杖で歩いたりそれぞれですが、他の方と殆ど変わらない生活をしています。被害に合われた方でも、自分で出来る事は日常生活においても畑仕事においても一生懸命なのです。日本では片足が無いと周りから好奇な目で見られる場合があるかもしれませんが、カンボジアではそういった事は一切ありません。それは村人が地雷と共存しているからなのだと思います。片足が無いのは正直不便だと思います。しかし彼らの一生懸命に生きている姿や笑顔を見て勇気をもらい、また現実を受け入れる事の大切さを学びました。

CMACの宿舎に行った時に、共に働いているお二人の話を聞かせて頂きました。内戦時、彼らは政府軍とポルポト軍で戦い合っていたそうです。この村でもクメールルージュによって殺された人が沢山います。しかし、今では殆どの方がポルポト軍を憎んではないそうです。「私たちは同

じカンボジア人であり、アンコール時代から続くクメール族の一員である。政府軍もポルポト軍も自分の国を守ろうと、お互い国の為になるようにとやってやっていた。それは一時的なものであるし、同じクメール人だから憎んでない。」そう言っていました。その言葉を聞いた時は心が震えました。「地雷を埋めるようにと言われて埋めていたら、実はポルポト軍の一員として埋めていたらしく、知らないうちにポルポト軍になっていた」というケースが多かったようです。村には元政府軍の人が少ないようですが、内戦終了後も嫌がらせなどは全く無かったそうです。昔は攻め合っていた関係でも今は同じ所に住み、笑顔で語り合い、同じ目標に向かって共に頑張っているお二人を見て、色んな事を乗り越えてきて、今は本当に平和で幸せな時代が来たのだと感じました。



敵だった2人も今では笑顔で一緒に働く仲間

5. 井戸のありがたさ



井戸の前で子供達と

今では手押しポンプ式の井戸が殆どですが、以前は素掘りの井戸を使っていたそうです。しかし、その井戸では幼い子供を含め、3人の方が落ちて亡くなられたそうです。井戸の無い所は何時間もかけて池や川に水を汲みに行き、雨季には雨水を溜めて使っていました。水汲みは子供の仕事です。池や川の水も時間の経った雨水も衛生的ではありませんが、井戸の無い所ではそういった水を使うしかなかったのです。

この村の井戸の殆どは日本の方の寄付によるものです。井戸のチェックには何度も連れて行って頂き、行った全ての井戸で村人達を集め一緒に写真を撮りました。井戸を寄付して下さった方への感謝やお礼の気持ちと報告、そして感謝の気持ちを忘れずいつまでも大切に使うって欲しいという村人へのメッセージの詰まった記念撮影なのだと思います。しかし、今も使えているのが殆どですが、残念ながら壊れたままになっている所もありました。

村のある裕福な家の井戸をチェックした時、高山さんからこんな話を聞きました。この家の井戸は初めの方に出来たものだそうですが、なぜ貧しい家でなく金持ちの家なのか、高山さんも疑問に思ったそうです。しかしそれは貧しい家だとお金が無い為、管理が出来ないからであり、金持ちの家に作って使いに来てもらうようにしていたのだそうです。助け合いの精神だなと感じました。しかしその家の井戸は壊れていました。「壊れたら壊れたままで自分では業者に連絡したりして直そうとしなかったり、NGO団体等が直してくれるのを待つだけで自分からは何もしない。大きな家を建てているのに井戸は壊れたまま。直せない訳がない。社会主義は人間をダメにする、何も発展しない。」高山さんはそう言っていました。あったらあったなりに、無かったら無かったなりにというカンボジア人の考え方がこういった所に見えて現れます。



冷たい井戸水で水浴び

ある小学校の井戸も壊れていました。貰った以上は大切に使う義務があり、自分達で直す責任があります。まず子供達を教育して子供から大人に影響を与えるようにしなければならぬのかもしれない。村人自身で井戸の管理をするという事は、お金や人、部品の管理や運営に繋がり、それが自立への近道になるのだと教えて頂きました。



木で補正された井戸

しかし次に行った村では、井戸の壊れていた部分を木で補整していました。壊れたら放置している所が多い中、修理代はないけれど直して使おうという気持ちが凄く伝わってきて嬉しかったです。チェックの後、休憩を兼ねてお店でスイカを食べていると、村のある女性が私の後ろから何か話しかけてきました。通訳の方に聞いてみると、「井戸が出来て私たちの生活は大きく変わりました。本当にありがとう。」という内容でした。私が直接井戸に関わった訳ではないけれど、村人たちの感謝の気持ちが強く伝わってきて本当に嬉しかったです。井戸によって得られるきれいな水は、安心して飲んだり料理に使ったり出来ます。体や衣類を綺麗に洗う事も出来ます。井戸水は生活においてかけがえのない大切なものなのです。

※井戸については、サマキ村でのホームステイ<生活の場>でも取り上げています。

6. ごみゼロ運動

<プレッシャー>

私が高山さんにカンボジア行きについてお話させて頂いた時、「ゴミ拾いの先生として指導をお願いします。」と言われました。私は今までにゴミ拾いはしても、その指導に携わった事がなく、指導について全く自信がありませんでした。

タサエン村に行ってから会う人会う人に「ゴミ拾いのスペシャリストが日本から来ました。」と紹介して下さいました。その度にプレッシャーを強く感じ弱気になっていましたが、途中からあの言葉は私に対してではなく、村人自身でちゃんとゴミ拾いができるようにという村人へのプレッシャーだったのだと気付きました。それからは言葉が通じなくても自分に与えられた使命をやり遂げようと努力するようになりました。

<ゴミの処理法>

日本も昔はそうでしたが、ここではゴミ処理がまだ発達していない為、燃やして処理をします。ナイロンやプラスチックを燃やすと有毒な物質が排出される為、環境に悪影響を及ぼすのは分かっていますが、カンボジアではゴミ拾いもままならない状況なので、そこまでの考えはまだ浸透していません。同時進行できるに越した事はないのですが、処理法云々よりもゴミを捨てない事や拾う事、そして燃やす事でゴミが消えて無くなり綺麗になるという事を徹底して浸透させ、そういった文化にまでもって行く事の方が先なのです。



ゴミは燃やしてその場で消滅！

<ゴミを拾わない訳>

ある日、地雷原に行くまでの道中、各家庭の庭を見ていたら、殆どの家庭の庭が掃除されていて綺麗になっていました。高山さん曰く、個人の庭は綺麗になってきたけれど、公共の場(道路・学校)はまだまだゴミが沢山あるそうです。誰かやるだろうという気持ちからなのでしょうか。

初めのうち、ゴミ拾いは井戸のチェック後にする事が多く、ある村で高山さん達が井戸を見ている間、私は村人に「ソムルーソムラン(ゴミを拾って下さい)」と呼びかけました。しかし子供達は私の言っている事も無視して井戸の方に行ってしまったのです。ゴミが散乱していて本当に汚かったし、無視された事に対して少し腹が立ったので、しつこく何度も声をかけるとそのうち拾ってくれ出しました。その家に備わっているゴミ箱を開けると何も入っておらず、まだまだゴミ箱にゴミを捨てるという習慣が根付いてないのだと感じました。高山さん曰く、来た時に掃除をしても次に来る時には元の汚さに戻っているらしく、習慣付くのにはかなりの時間がかかりそうです。

ある日高田さんからこんな話を聞きました。村の人達に何でゴミ拾いをしないか聞いた時、「ゴミを拾うのは本当に貧しい人がやる事。」と言われたそうです。「ペットボトルなどは業者が買ってくれる。しかし、ゴミを拾ってまで収入を得たくない、そういう事は本当に貧困な人がする事だから、自分がゴミを拾うと、自分が貧困でゴミを拾っているみたいだから嫌だ！」という考えなのだそうです。こういう考えを持った年輩の方は多いようです。子供は声をかけると素直にゴミを拾ってくれる子が多いのですが、年輩の方にはまだ抵抗があるようです。

<私の間違っただ思い込み>

実を言うと初めは、外国人が自分達の捨てたゴミを拾っているのだから、一緒になって拾ってくれるだろうと思っていました。しかしそれは大きな間違いでした。カンボジアの人は昔からゴミを捨てても拾う習慣がありません。カンボジアではゴミを捨てるのが普通で、拾っている人の方がおかしいと感じるのです。その考え方を考えるのはかなり大変な事だと思います。昔は全てのゴミは自然のもので、捨てても全て土に帰っていました。プラスチックやナイロン、ビン・カンなどのゴミは土に帰らないと分かっていますが、今までの感覚・習慣のままに捨ててしまうのです。それが文化にさえなっているのです。要らないものは捨てる、それが当たり前の事であり、ゴミをゴミ箱に捨てる、落ちているゴミを拾うという観念はごみゼロ運動により変化は出てきたものの、まだ殆どの人に浸透してはいないのです。外国人が自分達のゴミを拾っているから自分達も拾おうというように安易にはいかない問題なのです。

<1人で行動するという事>

研修の終盤で「大通りのゴミ拾いの指導を1人でする」という任命を受けました。ホームステイ以来の単独行動です。ゴミ袋を片手に宿舎から大道りまで徒歩約10分の間、通訳もなしに1人で何が出来るのだろうと考えると同時に不安でいっぱいでした。今まではゴミが落ちていれば、そこにいる人に「ゴミを拾ってください。」とカンボジア語で言っていました。自分が逆の立場だったらどうだろうと考えました。見ず知らずの外国人にいきなり「ごみを拾ってください。」と言われても、素直に拾う事は出来ない気がします。しかも自分の家の庭に入って来てそんな事を言われては逆に腹が立つかもしれません。私はまだ高山さんのように村人との信頼関係が築けていなかったの、まずはそこからやってみようと思いました。



リスを持った少女

通りには殆ど人がおらず、1人で歩きながらゴミを拾っていると、あるお宅の木陰でお母さんらしき人がハンモックに揺られ、その周りで子供達が遊んでいました。私はこの家族にまず心を許してもらえようと慣れないカンボジア語で天気の話や日本から来た事、自分の名前を言ったり子供の名前を聞いたり自分なりにコミュニケーションを取りました。そして子供が手に持って遊んでいたリスについて質問すると、後で食べると答え、子供が引っ張ってちぎれたリスの尻尾に驚きみんなで笑い合いました。子供達もだんだん気を許してくれ、お母さんも笑顔で笑いかけてくれたので、家の周りに散乱しているゴミをやんわり指摘し、一緒にゴミ拾いをしようと声をかけました。私が率先してゴミを拾い出すと子供達も拾ってくれて、あっという間にゴミ袋がいっぱいになり、沢山のゴミを拾う事が出来たのです。他の所でもそうでしたが、やっぱり子供は素直に拾ってくれる子が多かったです。

自分ひとりでやるという事は、自分で考え、自分で決め、結果を出すという事であり、現場に合ったやり方とは、自分が現場を見て何が必要かを見極める事です。この日のゴミ拾いでは、言葉も通じない初対面の人の心をどう動かすのかが自分の課題でした。ただ力づくで相手を動かすのではなく、相手が動きやす



みんなでゴミ拾い



こんなに集まりました！

くなる為にはどうすればいいかを考える事の大切さを再認識しました。宿舎から大通りまで歩いている時は本当に不安でどうすればいいだろうと心配ばかりしていましたが、実際に短時間で子供達と打ち解け一緒に笑顔でゴミ拾いが出来た事にはとても満足しています。時間はかかると思いますが、村人の中のゴミに対する意識が少しずつでも変わってくると嬉しいです。

※ゴミ拾いについては、サマキ村でのホームステイ・学校・結婚式の項目でも取り上げています。

7. サマキ村でのホームステイ

2日間かけてサマキ村にホームステイさせて頂きました。この村は高山さん曰く、6つの村からなるタサエンコミュニティの中でも2本の指に入る貧しい村との事でした。いつも高山さんと一緒に行動させて頂いていたので、このホームステイが初めての単独行動となりました。もちろん通訳もなく完全に1人です。村長さんに連れられてタークロウさんという方を紹介してもらいますが、クメール語で説明されたので全く分かりませんでした。しかしタークロウさんが私のお世話をしてくれるという事はなんとなく分かり、彼の助けもあって素晴らしいホームステイでの体験が出来たのでした。

<サマキ村でのゴミ拾い>

高山さんから「ゴミ指導係」として任命されていたので、早速タークロウさんと大きな袋を持ってゴミ拾いに出かけました。彼は道行く人に「ゴミを拾いに日本から来てくれたよー。」と言ってくれていたのですが、言葉も通じないし、何をしたらいいかも分からない、意見を言いたいけど伝わらない…、すごくもどかしかったです。

同じ村の中でも比較的きれいにしている家とゴミが散乱している家の差が激しく、きれいな家の前の道はゴミも少なく手で拾えるくらいでしたが、ゴミが散乱している家の前の道はゴミだらけで、手で拾うには余りにも無理がありました。どこかの家で箒を借りて一気に掃除したかったのですが、辞書を使いながら説明してもなかなか伝わらず、「okok」と言っただけで終わるものの結局伝わっていませんでした。各家庭の庭にも行って、声かけをしようとしたのですが、「家の敷地内はその家族に任せればいいから」というような事を言われ、道端から「ちゃんと掃除してねー。」というような事を声かけするだけでした。声をかけてもあまりしてくれないところが殆どでしたが、掃除をしてくれる人もいました。ここでもやっぱり子供は比較的良好にゴミ拾いをしてくれました。



いたる所に捨てられた無数のゴミ

村の中心の道路をずっと歩いていると、仕事の休憩中か何かで村人たちが集まって話をしていました。そこにも声をかけに行ったのですが、「取りあえず座りなさい」と言われ、輪の中に入れて頂く事になり、話している内容は分かりませんでした。みんな笑顔で笑っていて楽しそうでした。初めて会った私をその中に溶け込ませてくれて、なんて大らかで人間味のある人達なのだろうと心を打たれました。



村人たちの井戸端会議に参入！

2日目は6時に起床し、朝ご飯を食べてからゴミ拾いに行きました。2人の女の子と一緒に手伝ってくれ、村の端まで行きました。ゴミを集めて燃やすように声をかけても、「後です」とか「風向きが悪いから」と言い訳する家庭が殆どでしたが、素直にゴミを集め、燃やしてくれる家庭もあり、少しづつではありますが、掃除をするという事が浸透してきているのかなと感じました。

この村でも沢山のゴミを集めました。しかし一番頑張ってくれたのはタークロウさんです。後で高山さんに彼はサマキ村の

井戸の管理責任者だという事を聞きました。それなのに私よりも積極的に村の為に一生懸命ゴミ拾いをしてくださいました。本当に感謝しています。

<生活の場>

この村でのお風呂とトイレですが、案内された所は、ビニールシートで囲まれていて中はセメントを敷き詰めているだけでした。しかもその囲いは完全に閉まっておらず、1mほど空いていて外から中の様子が見えているのです。お風呂は井戸からバケツ一杯にした水を運んでその中で浴びます。体を隠す為に布を巻いて水浴びをするのですが、子供達が興味本位からなのか、覗きに来てとても恥ずかしい思いをしました。タークロウさんの家にはまだ囲いがあったので良かったのですが、殆どの家庭ではトイレや水浴びの場所はなく、トイレの時は畑に行き大自然の中で用を足すといった感じです。

休憩をしている時に家の横の井戸に何人も人がいたのに気が付きました。ある人は洗濯をし、ある人は歯磨きをし、ある人はバケツに水を張り家まで運び、ある子供は水浴びをしていました。この村では何気ない風景なのですが、この村の人達にとってこの井戸は生活の場であり、一部であり、無くてはならないものなのだと改めて感じました。



お風呂とトイレ



村人の生活の場である井戸

<折り紙から感じた事>

子供とのコミュニケーションを図る為に、折り紙でいろんな物を作ってあげました。子供から大人まで私の作るものに興味を持って一緒に折っていましたが、気が付くと折ってあげた物がぐちゃぐちゃになって足元に捨てられていたのです。紙を折るという行動が楽しかっただけなのか、或いは出来あがった物がぐちゃぐちゃになると必要性が無くなり、捨ててしまったようです。これを見た時は本当にショックでした。もし私が逆の立場なら、滅多に来ない外国の人が何か作ってくれて、しかもそれが見た事もないような物なら余計に大切な宝物として取っておくと思います。子供達が帰った後にはいくつかの折り紙が捨てられていました。どういう目的で作られているものなのか一切の説明していなかったの、どうやって遊んでいいのかわからなかったのかもしれない。しかし、貧しいけれど与えられたら与えられただけ、必要が無くなったら捨てる。あったらあったなりに、無かったら無かったなりに、と言う事なのでしょう。これも社会主義の名残なのかなと感じました。



村の子供達 おでこにツルが...

<きれいな服を着たい>



子供達のおかげでキレイになりました

夕食後、家の近所のゴミ拾いをしました。電気の無い村なので暗くなるのが早かったのですが、折り紙と一緒にした子供達が積極的に手伝ってくれました。しかしここでショックな事がありました。ある女の子が私に抱きつき、「いい匂い〜！」と言い、自分の服や他の子の服を臭って「臭い〜！！」と顔を歪めて言ったのです。毎日同じ服を着ている子は少なくなく、子供達はいくら村の生活が当たり前になっているとはいえ、やはり綺麗な服を着て清潔にしたいのです。井戸水で綺麗に体を洗っても汚れたままの服を着る、綺麗にしたいでもその術が分からないままです。その子の言動は今でも忘れられません。

<ホームステイを終えて>

JMAS の車が村長さんの家の前に止まっていたのに気付いた瞬間は本当にホッとして嬉しかったのを覚えています。その時私は家の前のお店で村の人達と言葉は通じないけれど、芋を食べながらワイワイしていました。そうしていると高山さんがそこまで来て、私の事を「村のおばちゃん！」と言ったのです。少しでもその雰囲気に入れ込んでいられたのかなと思うと嬉しかったです。それから村の人達に別れを告げ、宿舎に帰りました。サマキ村での生活では本当に色々な事があり、考えさせられる事が沢山ありました。本当に貴重な体験をさせて頂きました。このようなチャンスを下さった高山さんを始め、タークロウさんやその家族、村の人達や子供達、全ての方に感謝の気持ちでいっぱいです。



芋を食べる村のおばちゃん

8. 17家族

ある日、「17家族」と付けられた集落に連れて行って頂きました。「17家族」に向かうにも道路など無く、何度も車やバイクが通ってタイヤの跡で出来たようなガタガタ道でした。「どこにあるのだろう」と、ギリギリまで家があるのにも気付かなかった程でした。昔は17家庭あったそうですが、今では7家庭に減ったそうです。家の周りにはゴミが散乱していて、来ている服もボロボロで、他の村の人達より貧しい生活をしているの是一目瞭然でした。



17家族に向かう道なき道

<17家族で学ぶ農民の置かれている状況>

この村は農村であり、農地を持たない人は地主さんに雇ってもらい、殆どの人が少ない給料で農作業をしています。この集落に住んでいる人達は家の周りにある畑で働いています。地主は別にいるようですが、その畑はまだ地雷処理が終わっていない為、人を雇っているのです。地雷が爆発して足が亡くなった人もいたそうですが、貧困層の人は危険を冒してでも生活費を稼がなければならないのです。



子供らしからぬ表情の子供達

そんな危険を背負いながら働いても1日10000リエル(2.5ドル)の収入にしかならないそうです。2.5ドルは私が毎日宿舎で払っている1日分の食費です。日本円にすると約250円ですが、私は約250円で3食美味しい物を食べさせてもらっていましたが、彼らはその250円で家族を養わなければならないのです。もし地雷により働けない体になってしまったら、その収入は無くなり、さらに生活が苦しくなり、子供が地雷のある畑で働かなければならないという状況にさえなってしまうのです。そんな彼らを見ていて、毎日3食おいしいご飯が食べられ、周りの人が笑顔で笑っている事がどんなに幸せなことなのだろうと実感しました。

<赤ちゃんの成長>

約1年半前の某テレビ局の撮影の時に、栄養失調になりかけていた赤ちゃんがすぐ隣の家にいました。貧困が故に母親は栄養のあるものが食べられずお乳が出ない、貧困が故にミルクが買えずにいたのです。ミルクは1缶1週間分で10ドルするそうです。大人一人が1日に稼げるのは2.5ドル。その2.5ドルで家族を養う為には赤ちゃんのミルク代にお金を回せない、それが現状でした。しかし見かねた高山さんと高田さんが出し合って、ミルクを提供していたそうです。あまりそう

いう形で支援したくはなかったそうですが、赤ちゃんの命には代えられなかったそうです。しかしそれから1年半経ち、その赤ちゃんが大きくなっていたのです。と言っても、2歳なのにまだ1歳くらいの大きさしかありませんでした。ですが、栄養失調になりかけていた赤ちゃんが今元気に育っている姿を見て、高山さんは「もう大丈夫だな。」と本当に嬉しそうでした。私もテレビでその赤ちゃんの事を知っていたので、本当に嬉しく、ほっと胸を撫で下ろしました。私もいつか母になり子供を授かる時が来ると思いますが、その時にお乳も出ない、ミルクも買えない状況で愛する我が子をちゃんと育ててあげられなかったとしたら、本当に辛くて悲しくてもどかしい気持ちでいっぱいだと思います。その赤ちゃんのお母さんは、本当に感謝の気持ちでいっぱいだっただろうし、赤ちゃんを助けたいという、高山さんと高田さんの人間味を強く感じました。



大きくなりました！

9. 学校

学校は2部制で、午前の部は7時から 11 時半まで、午後の部は13時から17時までです。2部制なので、朝は畑仕事の手伝いをして午後から学校といったように、お手伝いと勉強を両立させている子も多いようです。以前は家の事情や畑仕事の手伝いなどで学校に行けなかったり、学校までの道のりが遠く通うのが続かなかつたりと、学校に行けない子が多かったのですが、今では殆どの子供が行くようになり、就学率も上がったようです。



ハウキでゴミを集める生徒達

CMAC の補助員試験の為に小学校に行った時、子供達の朝礼を見る事が出来ました。「前ならえ・休め」などを繰り返したのち、きちんと整列して国歌斉唱と共に国旗掲揚が行われました。日本では毎日生徒が集まって国旗掲揚をする学校は殆どないのではないのでしょうか。朝礼が終わると同時に先生の号令で全校生徒によるゴミ拾いが始まりました。沢山の生徒が一斉にゴミを拾い始めると、あっという間に校庭のゴミが無くなりました。しかし、打合せが終わり教室から出ていくと、沢山の生徒が校庭にいたのですが、朝自分達が綺麗にした場所にゴミを捨てていたのです。声をかけると拾ってはくれますが、ゴミをその場に捨てるというのは無意識の行動であり、捨てないという意識付けをするのにはかなりの時間がかかるのだらうと思いました。



きれいに揃えられた履物

ある村に行った時の事です。この地域は以前、地雷原の中に家や学校、道、畑があったらしく、安全な土地になるまでに4年半かかったそうです。その小学校に立ち寄ることになりました。この学校の敷地も地雷原だったと聞き、その中で子供達は勉強し、校庭で遊んでいたのかと思うと恐怖を感じました。この学校はいきなり行ったにも関わらず、履物は揃えられ、校庭や教室にもゴミがなかったのです。この学校の校長先生は初めて行った結婚式の時に紹介して頂いた先生で、高山さんも大変素晴らしい先生だと言われました。学校の状況を見るだけで、校長先生がどれだけ真剣に取り組んでいるのかが分かります。子供達にボールペンや鉛筆を、そして各教室に日本の子供達が描いた絵をプレゼントすると大変喜んでくれました。子供達はみんな手を合わせ深々と頭を下げてくれ、その嬉しさが伝わってきました。